

歴史から見たラテンアメリカのかたち：その2

—スペインの植民地時代が遺したもの—

渡邊利夫 *

【要旨】 この稿ではスペイン語圏の3世紀余にわたる植民地時代を扱う。前半ではコンキスタドーレスによる征服に始まって、スペインの植民地化、植民地時代の政治、経済体制や社会状況を説明し、キリスト教会の果たした役割を述べる。後半ではまとめにかえてこの体制が後のラテンアメリカに残した影響を説明する。それはラテンアメリカ政治の封建主義であり、貧富の格差であり、個人の独立や価値を大切にして社会の規則や秩序よりも人の緊密な関係であるペルソナリスモを優先する人々の気風である。この点がアングロサクソン系の北米と異なるところである。またポルトガル領ブラジルとの比較も忘れないでいたい。

キーワード：コンキスタドーレス、法に「服すれども、守らず」の伝統、ペルソナリスモ、貧富の格差、メスティソ文化。

* ラテンアメリカ・カリブ研究所上級研究員。1970年外務省入省、スペインを皮切りに米国、ブラジルを含めラテンアメリカ各国で勤務後、2010年から12年まで在ボリビア日本国大使。1986年ジョンズ・ホプキンス高等国際問題大学院(SAIS)留学。退官後南山大学などで非常勤講師。現在は先行研究に照らして現地で見聞した知識を整理する仕事をしている。本稿で示された見解は著者個人のものであり、ラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。

はじめに

歴史、文明、人種、自然環境の異なる新旧二つの世界の接触は 15 世紀末のコロンブスの「新大陸」到達をもって始まった。この「出会い」は、ヨーロッパに対するよりも、アメリカ大陸の先住民にはるかに大きなインパクトを与えた。3 世紀余にわたってスペインとポルトガルの植民地時代が続き、その時にできた政治経済社会体制、人々・社会の気風、宗教は後々までこの地に大きな足跡を残した。もっとも先住民が多く住んでいたメソアメリカ、中央アンデス地域では、彼らの文化や風俗風習、価値基準が現在まで残っている。この植民地時代の遺産は独立しても清算されるようなものではなく、意識、行動の基層を成し、マグマのように様々な局面で間欠泉のように噴き出している。現代のイギリスを代表する歴史家 J·H·エリオットが、その国の歴史は、植民の時期と地理・環境、先住民の存在などに加え、「植民者の本国における歴史、伝統、法、文化、価値観の差異が生み出す変数」であると述べている(エリオット 2017 p.193)。

ここではスペイン語圏アメリカの人々がスペインの植民地時代から受け継いできた政治経済社会の仕組み、人々の気風など、一貫して変わらなかったものを問うてみたい。筆者はこの論稿でラテンアメリカのうちボルトガルの植民地であったブラジルや英、仏、オランダの植民地であったカリブ海のジャマイカ、小アンティル諸島、ハイチ、キュラソー、スリナム等を除くイスパノアメリカを念頭に書いている。もっともイベリア半島の国で文化の根っこを同じくするポルトガルの植民地であったブラジルだけは、

スペイン語圏アメリカと同じような社会構造や人々の気風、気質を持っているので、比較という観点から随時触れていく。

1. 「大航海時代」のスペイン

ヨーロッパ人は世界の霸権と文明の中心が次第に東から西へと移動していくものだという古典古代の考え方を引き継いで西半球に乗り出していった。そういう知的雰囲気の中でスペイン人は「アメリカの未開人たちを開花させるための布教活動と帝国の建設を神から託された使命と考え新大陸」に渡った(エリオット 1975 p.150)。「新大陸」の歴史を知るには、ブラジルを除きここがスペインの植民地であったことから、スペインが当時ヨーロッパでどのような立場にあったかを見てみたい。

スペインは、「レコンキスタ」の夢を実現した「カトリック両王」が没すると、娘で狂女フアナの短い治政を経て、ハプスブルク家のマキシミリアン一世の長子フィリップとの間に生まれたカルロス一世(治 1516-1556)に引き継がれた。1519 年に 1438 年から神聖ローマ帝国の帝位を独占してきたハプスブルク家のマキシミリアン一世が崩御すると、カルロス一世はカール五世(治 1519-1556)としてスペイン、南イタリア、「新大陸」に加えて中欧、ネーデルラント、サヴォイア公国などの広大な領土を継承し、ヨーロッパで最強の王朝を築いた。ところがその代償としてスペインは神聖ローマ帝国が進める帝国主義政策の影響を受けるようになる。カルロス一世はキリスト教の守護者としてプロテstant勢力の鎮圧に尽力した。1529 年にオスマン帝国により帝都

ウィーンを包囲されるなど、東欧・地中海でイスラム勢力から旧世界を防衛し、帝国内で宿敵のフランスヴァロア朝のフランソワ一世(治 1515-1547)とイタリアで領土争いをしなければならなかった。スペインはその犠牲となって働いた。

神聖ローマ帝国以外の領土を継承したフェリペ二世(治 1556-1598)の時代になると、「新大陸」の銀が大量に入ってくるようになり、1559 年の「カトー・カンブレジ和約」でフランスにイタリアに対する要求を放棄させ、1571 年の「レパントの海戦」でオスマン帝国に勝利して地中海への進出を一旦くじくことに成功した。またフェリペ二世は 1580 年にポルトガルの王位を継承し、両国と「同君連合」になった。カルロス一世はまだヨーロッパの支配者という認識であったが(エリオット 1975 p.137)、フェリペ二世の時代になってスペインは名実とともに「太陽の沈まぬ帝国」になった。スペインの絶頂期は 1560 年から 1640 年にかけてで、植民地からの富がそれを支えた。

2. 封建主義下のアメリカ植民地

スペインの植民地になる「新大陸」

コロンブスが「新大陸」から帰還すると、「カトリック両王」はこの新たな土地の領有の権原をローマ教皇に求めた。アレクサンデル六世(位 1492-1503)は 1493 年に「贈与大教書」を出した。これを根拠に広大な南北アメリカ大陸がスペインの「カトリック両王」の持ち物になった。なおブラジルは 1494 年の両国の「トルデシーリヤス条約」によってポルトガルが領有することになった。そして「レコンキスタ」を終えたばかり

のスペインが「新大陸」を“コンキスタ(征服)”したことによって、この地域は中世のギリシャ哲学、古代ローマの法律・政治の理念と制度、キリスト教信仰、ゲルマン人の民族的慣習を核とするヨーロッパの文明圏に入った。先住民はスペイン国王の臣民となり、支配者のスペイン人とそれに従う先住民という構図ができた。

コンキスタドーレスによる征服

道徳的、倫理的、宗教的原理が支配的であった中世から、個人主義、理性に目覚めるルネッサンスへの移行期にあって、征服者コンキスタドーレスは中世的な思考を引きずりながら「新大陸」へ遠征に乗り出していった。近世になって君主の支配力が強まったと言っても、まだ国民国家もナショナリズムも生まれていなかった。この時代のコンキスタドーレスの精神とは、国王に対する搖るぐことのなき忠誠心、キリスト教への信仰、征服への報酬である金銀の物欲、貴族という地位や現世での栄光・名声であった。フランシスコ・デ・ソラーノも、「レコンキスタ」がグラナダ王国の征服によって終わり、スペインで「領土獲得、キリスト教布教、社会的・経済的上昇」という三つが終末を迎えたことで、「その改宗勧誘、領土拡張、主戦論という聖戦の精神が(「新大陸」の : 筆者加筆)『発見』を契機にインディアスに向かうことになったと述べている(ソラーノ 1998 pp.256-257)。

植民地の政治体制

それではスペインがとった植民地政策とはどのようなものであったか。その基本方針は、先住民に対する統治と貴金属を中心

とする富を収奪する体制を構築することであった。アステカ王国やインカ帝国の国家機構の大枠は破壊したものの、その基礎にあった先住民の共同体を温存し、貢納システムとして存続させ利用した(宮野 1992 p.118)。

植民地には三つの権力の中核があった。その第一は、征服者、町の指導的な植民者、王室から特権を認められたエンコメンデロであった。「新大陸」には旧大陸におけるように貴族はいなかった。第二は先住民をキリスト教に改宗させようとした教会である。第三は統治者である王朝であった(ギブソン 1981 p.53)。

エンコメンデロは国王から下賜された一か村もしくは数か村の土地と先住民を「保有し」、先住民から生産物の租税と労役を徴発した。その代わりにエンコメンデロには先住民をキリスト教徒に改宗することが求められた。この制度が極めてルーズ、無統制であったことから、彼らは先住民を酷使した。「カトリック両王」のフェルナンド王は教会からの非難の声にこたえて先住民を保護するために「ブルゴス法(1512年)」を公布した。しかし現地ではエンコメンデロの激しい抵抗に遭い、結局この勅令は遵守されなかつた¹。時代が下ると、新しいエンコミエンダの割り当てはコンキスタドーレスから王室を代表する役人の手に移り、新しいエンコメンデロになった。それは国王に仕える官吏であったり、聖職者であったりした。彼らが貴族になるのを恐れた王室は

下賜されたエンコミエンダの保有期間を数年・一代に制限しようとしたが、エンコメンデロはその特権を妻子へ遺贈したので、事实上の貴族階層になった。そこで王室は次第にエンコメンデロの行動に制限を加えながらも彼らと共に存し、租税を徴収することの方に関心を持つようになる。しかし天然痘、腸チフス、はしか、インフルエンザなどの疫病より先住民数が急減すると、この制度は16世紀末までに衰退した(1718年に正式に廃止)。

第二の権力の中核は教会であった。「カトリック両王」は1486年にローマ教皇から教会の要職につく候補者を指名・推薦する権限を得て宗教の保護者であった。これが「パトロナト・レアル(国王教会保護)」である。「新大陸」については1501年と1508年の教皇大勅書よってそれが認められ、教会の権力と収益を監督した。ブラジルでは1551年にポルトガル王がユリウス三世(位1550-1555)から得た新発見地の「パドロアド」がその始まりで、教会の問題について絶対的な力をもった(オランダ 1976 pp.125-126)。

他方で、「パトロナト・レアル」は聖職者を国王の官吏として統治体制に組み込んだばかりか、教会が国事や政治的事柄に干渉することを認めることを認めていた(ギブソン 1981 p.87)。教会が権力に挑んだことのなかったアメリカ合衆国の場合とは異なる(名古 1992 p.96)。

第三の権力の中心は王朝であった。王権

¹ 1520年の勅令ではいかなる理由があろうと先住民を奴隸にすることが禁止された。ところがさまざまな方面から圧力をかけられて4年後に一度破棄されたが、1542年の「新法」でよみがえった。この「新法」は奴隸所有者が奴隸を保有する正当な資格があることを証明すべきことを規定した(エリオット 2009 p.72)。

は、征服直後からコロンブスに与えた途方もない特権を取り上げ、エンコメンデロに与えた特権を取り戻し、伝道士の持っていた権力と権威を王権のものにした。その後にできた体制は中央集権的な組織で、カスティーリャ国王の諮問会議である「枢機會議(「新大陸」の統治に関する最高の行政・司法機関)」による直轄方式であった。王室を代表する現地の最高の官職は「副王」で、「枢機會議」が立案、発布した勅令を現地で施行した。その法令は個別に出されたもので、しばしば冗漫で、外見上は整然としているが、内容的には矛盾に満ちたもののが多かった。そこで「副王」が植民地の実態に即して法令の意図を実質的に変更した。植民地とスペインの間には地理的隔たりがあり、法令の解釈と施行ぶりが違っても致し方のないことであった。

封建的な経済体制

ここで植民地の経済体制はどんなものであったのかを見てみたい。16世紀前半までにコンキスタドーレスはアメリカ大陸の征服を終えた。その後1545年に発見されたポトシの銀山に始まり、その翌年メキシコで銀山が次々に見つかり、銀を中心とする収奪経済であった。鉱山では多数の先住民が酷使された。

他方農業では、征服に貢献した者がレパ

ルティミエント制で先住民の割り当てを受けて、彼らをエンコミエンダ²で労働力として使役し国に貢納する仕組みであった。王室は官僚を派遣して目をひかせた。この制度は副王領の中心に近い先住民人口の稠密な地域で一番機能した。王室は次第に人道主義の立場から先住民に過酷な労働を強いるこのエンコミエンダ制を徐々に廃止しようとするものの、実際には現地の反対でその根絶は難しかった。フェリペ二世の時代に王室はひっ迫する国家財政を立て直すために、1591年にスペイン植民者に対し土地を有償で譲渡する新しい政策を作った。所有者不明の先住民の土地や人口減少で無主の土地、開墾されなくなった土地を競売するとともに、土地を所有しながら、その正当な権利を明示できないスペイン人に一定額の税を納めさせることによって、その権利を正当化する方法(「コンポシシオン」)を思いついた(ポマ 1992 p.193)。

それでも17世紀半ばになると、先住民の減少もあって彼らを労働者として使うことがますます難しくなり、現地生まれのスペイン人であるクリオーリョ³の植民者は、建前上自由な賃金労働者であるペオン制、実際には債務労働者制度を生み出し、これが18世紀にかけて一般化した。ペオンと呼ばれたこれらの労働者は様々な名目で負債があったために、雇用者から合法的(半合法

² 「エンコミエンダ」とは、もともと封建君主の賦役貢納権を私人に対して委託する制度で、征服直後の30年間に「新大陸」に導入された。王室は早くから先住民を守り、エンコメンデロが封建領主化するのを防ごうと、相続の禁止、官吏による貢納額の査定、先住民の賦役の禁止、集住化政策などで制限を加えるようになる。

³ “クリオーリョ(Criollo)”は、マリア・モリネールの『スペイン語用法辞典』によれば、その語源がポルトガル語の crioulo で、大邸宅で育てられた黒人の意。イスパノアメリカではアメリカで生まれたスペイン人の子孫の意。ちなみに本国生まれのスペイン人はベニンスラールである(但し一代限り)。

的)に強制労働させられ、一生涯土地に縛られた(ギブソン 1981 p.157)。アステカ王国、インカ帝国のシステムは征服によって破壊されたものの、先住民の多く住む地方で昔からの制度・伝統がそのまま残され温存利用された。そして王室は地方官吏のコレヒドールを通じて現金ないし物品で租税を徴収した。

このようにクリオーリョと先住民との経済関係は政治体制と同じように封建主義的なものであった。それでもスペイン化が進むと大規模な先住民の共同体には白人社会をまねたカビルド市参事会が生まれ、先住民の長であるアルカルデ、評議員レヒドールも生まれた。

植民地の社会

征服期が終わってメソアメリカ、中央アンデスなどの先住民が多くいた地域の社会がどうなっていたかというと、王室、教会、クリオーリョの三者が基本的に利害の対立する関係にありながらも、全体としては、寄生的、閉鎖的な中央集権的・封建的体制を作っていた。経済分野では 17 世紀に先住民を使役するアシエンダ(大農園)制や鉱山事業が定着し、スペイン人の上流階級、征服者たちの子孫、遺贈や寄進で富を蓄えたカトリック教会などは、裕福な生活を楽しんだ。肉体労働をさげすみ、黒人、先住民と混血メスティソを働かせた。同業組合(グレミオ)ができ、その職人には先住民かメスティソが多かった。イスパノアメリカの植民地社会は一種の貴族社会であった(ピコーン=サラス 1973 pp.119-120)。

ちなみにブラジルでは、北東部地方で砂糖農園主を中心とする農村社会ができ、そ

れが 16-17 世紀の黒人奴隸を使う大規模な砂糖生産プランテーションになった。歴史家 S・B・デ・オランダによれば、ポルトガル人の特徴として、怠惰を選択して肉体労働を否定するところが強く(オランダ 1976 pp.12-14)、入植者はアフリカ系黒人奴隸を使って、外見を飾って貴族のような生活を送ったという。というのも、北・西欧のプロテスタント諸国民が肉体労働を賞賛したのとは異なり、イベリア半島人の国民性は、「労働を神聖視する考え方に基づくあらゆるモラルに対して」、「日々のパンのための健全な戦いよりも名誉ある怠惰」に価値を置き、安逸を好み、生産活動に価値を見つけなかつた(住田 2022 pp.28-29)からである。

都市はスペイン人の生活の場であり、政治の拠点

植民が始まった当初にどのような人たちがスペインからアメリカ大陸に向かったのか。イーダ・アルトマンによれば、スペイン南西部のエストレマドゥーラ地方が初期の重要なインディアスの征服・開拓・定住の輩出地の一つであった。この地方からアメリカ大陸に渡った者には、アステカ王国を征服したエルナン・コルテス、インカ帝国を征服したフランシスコ・ピサロ、そしてフランシスコ・デ・オレリャーナ、エルナンド・デ・ソトやペドロ・デ・アルバラード、インディアスの総督になったニコラス・デ・オバンド卿などがいる。「通商院」があり「新大陸」の窓口であったアンダルシア地方のセビリアも多くの植民者が出了た。「新大陸」に渡る者には下級貴族や貿易商人、農夫、職人などの平民が多かった。貴族の第二、第三、第四

子にとって、一攫千金のできる「新大陸」は魅力的に映った。その彼らが母国で馴染んでいた王権への奉仕、貴族的な社会、軍役を含む指導的役割、階層的な社会秩序、富裕な階層・役人・聖職者と随行して渡航した召使・従者の間で生まれたパトロン・クライアント(恩顧・庇護)の関係、人種的多様性や奴隸制などを新世界に持ちこんだ(アルトマン 1998 pp.222-227)。

コンキスタドーレスは、防衛や通商のための沿岸部を除き内陸部に整然とした都市を作り、そこを拠点として植民地社会を作った。新世界の植民地は都市の帝国であった。「植民地支配は、この都市の建設と拡大を通じて実施され」、先住民の農村支配を実現した。また「スペイン植民都市は、『植民の代理人』として、『帝国の前哨基地および支配の拠点』として、植民地の建設に重要な役割を果たした(宮野 1992 p.105)。ちなみにローマ帝国時代都市は、軍隊が置かれ「ローマ人である」というアイデンティティで異民族を帝国に引き入れ、国家統一するための拠点であった(南川 2013 pp.23-24 & p.40)。ローマ帝国の属州であったスペインでも「レコンキスタ」の時代を通じて⁴都市が政治の中心であった。

「新大陸」の最初の都市であるサント・ドミンゴ、ハバナなど沿岸部の都市は海洋貿易を生業にしていたが、次第に海賊の脅威に対して防衛の役割を担った。その沿岸都市には、フロリダのセント・オーガスティ

ン、メキシコ東岸のベラクルス、パナマのポルトベリョ、南米大陸のカルタヘナがあり、商品の集積地でもあった。内陸部の都市はそれと異なり、メキシコ市はアステカ帝国の帝都の上に建設され、ペニブラは先住民の住む農村地帯の中にメキシコ市と貿易港のベラクルスを結ぶために白人移住者が作った町である。リマは沿岸都市であるが、「副王領」の政治、経済上の首都で、商品の分散地の役割を担っていた。その他にグアダラハーラ、パナマ、キト、クスコは行政機関の「アウディエンシア」が置かれた地方都市であった。ポトシは有名な銀鉱山の町であった。1520-1573 年までに主要な都市が建設された。

スペインは、「新大陸」を植民地化するにあたって、ギリシャやローマ帝国のように安定した地方権力組織を育成し、本国の軍事的、経済的、政治的優位を誇示しようと都市を建設した。それは先住民を見て感服することを意図していた。都市の建設は 1573 年の「入植基本法」によって主要構築物の配置が細かく規定されていた。15世紀末にイスラムの「ナスル王朝」のグラナダを攻撃する際に建設された攻城都市サンタ・フェに倣い、意図的、計画的に作った。中央広場を中心に碁盤の目状に街路が設けられ、「カビルド(市参事会)」の建物、教会、官吏の「コレヒドール」、「アルカルデ・マヨール」の邸宅、主要な商館が整然と建てられた。白人はその都市に大家族で暮らしながら、近隣に

⁴ イスラムでは、都市の(すなわち定住した)アラブ人と砂漠(遊牧民)のアラブ人がいたが、砂漠の民であるアラブ人は都市のアラブ人を馬鹿にし、彼等から保護料をとっていた。ところがもともと砂漠出身の「ウマイヤ朝」が、占領したダマスカスなどの地中海沿岸の都市文化(ビザンチン帝国)の文化に魅了され、砂漠の遊牧民としての特質を失い、その伝統を継ぐ「後ウマイヤ朝」がイベリア半島を占領したために、「レコンキスタ」の時代にもスペインで都市中心の伝統が残った。

あるアシエンダで先住民の労働力を使い、鉱山を開発して搾取型の生産形態を築いた。

これに対しブラジルでは、植民地の建設が北東部の砂糖農園から始まり、都市はそれ程重要ではなかった。都市は田舎に従属する形ででき、本国との交通に便利な海岸部にあった。その後先住民のトゥピー族を追って内陸部・高原地帯にも作られた。17世紀末のミナス・ジェライスの金鉱の発見がそれに拍車をかけた。S・B・デ・オランダは、農村地帯は経済的、社会的に大農場主の支配がおよぶ一つの世界で、そこに生まれた家父長的風潮がブラジルで長く続いたと言う(オランダ 1976 p.60 & pp.83-84)。なおスペイン語圏と異なり、町並みは計画性がなく不規則に作られた。

イスパノアメリカの都市では本国生まれのペニンスラール、クリオーリョや白人と結婚した先住民の女性などが住み、先住民たちはその外側の居住区に暮らしていた。白人の強い階級意識が都市を支配していた。血のつながりの薄い身内を含めて「家族は強く結ばれた一単位で、いわば強制的な忠誠心や義務感を呼び起こすもので」、「血のつながりが一族のあらゆる事業においてある役割を果たした」。「肥大化した家族によって、植民地の政治分野における忠義や党派、下級官吏の任命、ひいき」が決まった(ギブソン 1981 p.138)。

3. カトリック教が支配的な地域

カトリック教の布教事業

「カトリック両王」が教皇から「新大陸」の「贈与大教書」をもらった時、それは先住民をキリスト教徒に改宗することが条件で

あった。スペインの君主にとって先住民に対する宣教という神聖な事業は、植民地経営の根幹を成すもので、国権は神の配慮に奉仕するためにあった(ピコーン=サラス 1973 pp.57-61 & 64-65)。国は教会を支援する「世俗の腕」であり、「信仰を守る剣」であった。また「新大陸」での布教は旧教の側からのプロテスタントに対する対抗宗教改革の役割もあった。

そこで宣教のために多くの伝道修道士が「新大陸」に渡っていった。彼らは先住民をキリスト教徒に改宗させ、教育・文明化して人間らしくするという使命に燃えていた。土着宗教の偶像、神殿、異教であることを示す物を破壊し、その後にキリスト教の礼拝堂や教会を建て、先住民に布教の場とした。他方で理想に燃えるドミニコ会等の修道士たちは、布教を名目に先住民に対するエンコメンデロによるひどい扱いを批判した。その時に活躍したのがバルトロメ・デ・ラス・カサスである。

先住民に対する布教

「新大陸」に渡った修道士の布教活動は真摯なもので、理性に欠けると見なされていた先住民をキリスト教徒に改宗し、地上の楽園を作ろうとした。その夢の実現は決して容易でなかった。宣教師はまるで先住民の子供になりきり、親しく交わって、彼らを理解しようとした。苦労して現地語も学んだ。メキシコで有名なペドロ・デ・ガンテ修道士は、テスココで職人階層を育てるために「サンフランシスコ学院」を設立し、先住民の地位と文化の向上に努めた。特に活躍が著しかったイエズス会は南米南部で先住民のための「教化村」を作った。

ところが 16 世紀中葉を過ぎると修道会による布教の熱意が失われ、教区司祭が重んじられるようになった。プロテスタントの攻勢を前に開催された「トレント公会議(1545-1563)」で、司教、司祭の規律の遵守、信徒への奉仕、先住民に寄り添う姿勢を重んずる方針が出されたもの(網野 2022 p.180)、17 世紀になるとクリオーリョ社会で君臨することが重視されるようになり、教区司祭の中には商行為による蓄財や他の宗教会との対立に没頭する者が現れた(ピコーン=サラス 1973 pp.120-121)。なかには不道徳に走る司祭も生まれ、フェリペ三世(治 1598-1621)宛に『新しい記録と良き統治』と題する書簡を書いたアンデスの記録者フェリペ・ワマン・ポマ・デ・アラヤは、

「インディオから妻子を奪い、キリスト教の教えを授けるためだと言つて、一〇の少女までも犯し、さらに労働を強制し、コレヒドールと同様、彼女たちを自分の手元に隠匿する」者がいると批判した(ポマ 1992 p.173)。18 世紀になると蓄財に努めた教会は最大の土地持ちとなり、建物、牧場、家畜、製粉所、農耕器具を保有し、事業に投資をするようになった。裕福な人々からの寄付金と遺贈を受けてメキシコなどで今に残る壮大な宗教的建物を造った。ブラジルでも悪徳神父、怠惰で強欲で放縱な神父は例外的でなかった(オランダ 1976 p.127)。

他方でメキシコ、中央アンデスの先住民の多い地域では、先住民の間で土着宗教との融合・混淆が進み、自然の一部が重要な宗教的シンボルとなり、偶像崇拜、伝統的宗教

儀礼が行われるなど、二つの宗教の重層化現象「シンクティズム」が発生し、異教信仰のキリスト教化という現象が進んだ(ギブソン 1981 p.81)。

教会が一翼を担った植民地の封建主義

植民地で多数の聖職者が国王の権威に服する王吏になり、植民地行政に組み込まれた。それは教会が王権の進める「階層的な社会構造と一部富裕層による寡頭支配を支える役割を果た」すことであった(遅野井 2005 p.75)。ポルトガル国王が「パトロアド」を持っていたブラジルでもやはり「教会は世俗権力の単なる手先、世俗権力の一部局」、「権力の道具」であった(オランダ 1976 p.126)。

ブルボン王朝下のスペインは、自由科学的な経験論、プロテスタンティズムの職業倫理と資本主義の精神、フランスの「百科全書」派の諸理念など新しい思想に背を向け、それが近代史のダイナミックな動きと工業化の流れに乗れなかった原因の一つになった(エリオット 2017 pp.124-126)。ピコーン=サラスによれば、他のヨーロッパ諸国の後塵を拝したスペインが社会秩序を重んじる教会と密接な関係の下で進めた保守的な植民地政策がラテンアメリカの発展を遅らせ、それは「スペインから引き継いだ暗く否定的で非能率な遺産」であった(ピコーン=サラス 1973 pp.64-66)⁵。この影響によるもののか、イスパノアメリカ人は経験主義的な自然科学、進歩と変革に背を向け、プラグマティズムや科学技術革新を高く評価せず、

⁵ ラテンアメリカが未だ中進国地位に留まっているのは、植民地時代のスペインやカトリック教の保守主義だけが原因でないのは当然である。経済発展には色々な理由がからむ。

人文主義的で物質よりも言葉とか観念により高い価値を与えているところがある(大貫 1984 pp.327-328)。

まとめにかえて—植民地時代が遺したもの

ここからは植民地時代が遺した政治風土、経済・社会状況、人々の気風についてまとめておく。この時代にできた文化ははるか遠い昔のものではなく、今でもラテンアメリカの基層を作っている。これを見ると、3世紀に亘って続いた植民地時代がいかに大きな遺産を遺したかがわかる。

植民地時代の封建主義

「カトリック両王」が、「レコンキスタ」運動の政治的・宗教的延長として「新大陸」で植民地化を始め、領土の拡大と布教に努めたことは先に述べた。植民地の統治形態はカスティーリャの法と制度を引き継ぐもので、本国から派遣された「副王」、「総督」、「軍事総監」等の官僚を通じて行う直轄領方式であった。王権は「副王」の他に諮問機関として「聴訴院」を並存させるなど、両者の権限が重複する体制にした。その理由は、王朝が「副王」等の治世者に対し不信感を持っていたことで、遠隔の地で一人の人間に権力が集中しないように牽制させる形にした。宗教問題については1569年に「異端審問所」を設置して取り締まった。現代でも公権力間の権限の重複や国の諸機関の仕事の

範囲が明確でないという点で名残が見られる(ヒル 1971 p.20)。

植民地時代のイスパノアメリカは中央集権的な政治体制であった。独立しても政治は中央集権的、封建主義的で、カウディリョ(ボス)政治や軍事政権が続いた。民主主義の世になっても大統領の権限は強大で、時には民主主義や法制度をないがしろにして専横的ですらある。この地域では三権分立の原則による議会や司法のチェック機能が十分に働いていない。

法に「服すれども、守らず」の伝統

イスパノアメリカでは、植民地時代に持ち込まれたスペイン中世の封建的な慣習が残った。その一つが法に「服すれども、守らず」である。その源は中世の一定の地域や都市が持っていた自治権の「フェロ」⁶違反は違法であるという考え方である。人々は、王室と民衆の主従関係は自由な人間同士の契約が基本となって生まれるもので、王の受け入れがたい行動や命令に抵抗し、君主に抵抗することは正当な権利とみなした(岩崎 2017 pp.45-47)。

このスペイン中世の伝統が「新大陸」にも伝わり、植民者は王権が決めたからといってその土地なりの事情もあるとして法律を素直に守ろうとしなかった。本国の王権としても遠距離でそれを取り締まる術がなかった。実際に植民者のサボタージュによって法律の効力が実質的に骨抜きになるなど

⁶ 「フェロ」とは、スペインの「レコンキスタ」時代、王権や領主が一定の地域や都市に一種の自治特権を授けたことから始まった制度で、中世のスペインではほとんどの町や共同体が「フェロ」という伝統的諸特権を享受し、自分達の権利を守ろうとした(ケイメン 2009 p.15)。

の事例が度々発生した⁷。その最たる例としては、酷使される先住民を保護するために、王室はたびたび先住民保護の法令を出したものの、エンコメンデロによって苛酷な労役が課せられるという状況は変わらなかつた。

その伝統なのか、人々の法律に対する姿勢、慣行は独立しても変わらず、今日でも法に「服すれども、守らず」の慣行がある。近世になって「專制」を「法治」に変えたイギリスのジョン・ロック流の市民間の平等や自由を重視し、法を絶対視するアングロサクソン流の文化とは異なる。そしてイスパノアメリカの人々は、「不法」状態の中で生きることに慣れ、法の回避という現象が起きている(ヒル 1971 p.27)。人々は国家に対し不信感を持ち、法がすべての市民に対して公平に適用されるとは期待しておらず、「法や良心に従って行動するものを愚者(トント)とみなし、賢者(ビボ)は愚者を食い物にして生き、愚者は自らの労働で生きるとの考え方がある、「ペルーなどいくつかの国」でみられる(中川 2005 pp.126-127)。

ブラジルには、広い意味での問題解決法、人生哲学として「ジェイチーニョ」がある。人脈を使うなどして、法律をすり抜けてでも物事をうまく処理する術のことである。ブラジルでこの裏街道的風習があるのは、近代的自我が確立しておらず、多分に旧弊を残しているからである(中隅 1994 p.144)。ここにもスペイン語圏と共に通する法や規則を軽視する考え方があるような気がする。

ラテンアメリカは階級社会

20世紀に入ってラテンアメリカでは、労働者や農民、先住民など下層階級の政治的台頭があり、経済社会制度の改革が進み、社会の流動性が高まった。それでも未だ階級社会である。中川文雄によれば、ブラジルは①大農場主、大・中の企業家、政治家、高級軍人、テクノクラート、そして外国人の多国籍企業経営者から成る支配階級が3.2%、②医者、弁護士等の自由職業人の大部分、教師、小企業主、商店主、公務員、ホワイトカラーの中間層が24.2%、③零細農、小作人、工業労働者、サービス産業労働者、職人、運転手、小店舗主、女中などの下層階級が34.0%、④農村の季節労働者、都市のインフオーマルセクター、女中、売春婦、乞食、スリ、犯罪者などのアンダークラスが38.6%である(1980年)。他の国でも構造は同じである。もっともこの階層化は絶対的なものではなく、階層間の通婚によってある程度は変わることから融和的であるとのことである(中川 2005 pp.121-123)。

その根っこは植民地時代にある。イスパノアメリカの植民地は、ヨーロッパ中世の政治思想に基づく身分制の統治で、ペニンスラール、クリオーリョ、混血のメスティソ・ムラート、先住民、黒人奴隸などの階級社会であった。スペインの王権に植民地を発展させるという意識が希薄であったことから、この階級制度は取奪的掠奪的なもので、社会に深く根をはった慣習によって裏打ちされていた(ヒル 1971 pp.27-29)。この

⁷ 1572年から1586年までペルーに滞在し1576年に「インディアス布教論」を書き上げたイエズス会士のホセ・デ・アコスタが、ペルーが本国から余りにも遠方に位置していることから、統治する者は王権と自分とは関係がないと考え、自由奔放に流れ、まるで王令に服そうという気がないと嘆いているのは興味深い(アコスタ 1992 pp.186-187)。

階層の下部に黒人奴隸や先住民が置かれ、血統の純粹さや肌の色に照応した身分的秩序の中で差別や不平等意識が生き続け、民主主義的な平等社会の発展を阻害した。

大土地所有制から生まれた格差社会

イスパノアメリカで先住民は経済的に隸従状態に置かれ、先住民の労働力を必要としたスペインによって搾取された。酷使や1550年頃から蔓延する伝染病で人口が減少したことから、17世紀になると放棄された土地を使って牧畜という経済活動が勃興し、大農園アシエンダができ、有産階級が生まれた。彼らは先住民から土地を強制的に取り上げてアシエンダを大きくした。また国から下賜された小さな土地を買い集めた。「副王」、高級官吏、富裕な商人、教会関係者が所有主であった。このアシエンダは相続税などの税制が土地所有階層に有利であったことから一族の間で代々引き継がれた。先住民は債務労働者としてペオン制になってしまって強制的に働かされた。ペオン制は批判されることもなく、18世紀前半から先住民が増加した後でも20世紀になるまで続いた。こうして貧富の格差が固定化した(ギブソン 1981 pp.157 & 164-167)。

19世紀にラテンアメリカが世界経済に組み込まれると、旧来のアシエンダは中米のコーヒー、ユカタン半島の麻、ペルーの綿・砂糖、キューバの砂糖など輸出指向型プランテーションになり、資本主義的企業経営で農作物が生産された。モノカルチー経済である。アルゼンチンではパンパ平原で先住民を駆逐した後に大牧場が生まれた。農業・牧場主は賃金労働者を雇用し、機械や肥料に投資し、輸出に力を入れた。すると土地

と富と権力がますます少数の大農園主の手に集中し、寡頭支配体制へと発展した。大多数の農民は土地を持てないか、持てたとしても生活を維持するにも不十分な土地しか持たず、プランテーションの季節労働者となり、貧困に沈み、政治システムからも排除された(三田 1995 pp.24-27)。

もちろん貧困な人々が社会で這い上がれないのは大土地保有制だけの問題ではない。相続税制の不備、社会階層間の移動性の欠如、教育機会の不均等性など様々な要因がある。問題は貧困が生まれる仕組みがラテンアメリカ社会にビルトインされて、構造的なものになっていることである。渡部和男は、貧富の格差が固定化していく様を興味深い例で紹介している。彼が在勤したコロンビアの首都ボゴタにコレヒオ・ヌエバ・グラナダという小中高一貫校があるが、卒業生はボゴタ周辺の一流大学に進学し、コロンビア社会の指導者層に上り詰めていく。ここ的小学校に入学させるためには、入学金が一人当たりに日本円で150万円近く要ることで、結局コロンビアの裕福な家庭の子弟のみが通うことになる。この学校で培われた子供あるいは保護者同士の人間関係はいろいろ役に立つコネとなって、一生続くことになる。他方そこの学校に行けない貧困家庭はいつまでも貧困のままで、「貧乏人同士のもぐらたたき」の中で生きる。バスや地下鉄の中のスリ、街中の窃盗、強盗はとある貧乏人から別の貧乏人への所得の移転を行うだけである。貧乏人は貧乏人同士で限られたパイを奪い合う。負の連鎖である。車を使う金持ち層は、もぐらたたきに加わることなく、別の世界でセーフティネットに守られて、一生涯を過ごす(渡部

2023 pp.196-197)。

ペルソナリスモの文化

植民地時代から残るラテンアメリカ社会の特徴の一つが、濃密な人間関係を重視するペルソナリスモである。その根底には「法律や国家、行政機関など冷たい非人格的な存在を信用せずに、家族や友人など個人関係を尊重する価値観・考え方」がある(渡部 2023 p.198)。法律や制度が柔軟に解釈されるので、人はそれを余り頼りにしない。そこでペルソナリスモ、すなわち濃密な人間関係を軸に安心できる空間・サークルを作っている。

ペルソナリスモの文化の起源は古い。征服が始まった時代、スペインのアンダルシアは恩顧・庇護関係が大切にされるクリエンテラの社会で、一族の結集、血の結束が大切にされた(ラデロ・ケサーダ 1998 p.70)。コンキスタドーレスは王室に働きかけ、協定を結び、司令官になって隊を組織し、財源の確保と隊員の召集に奔走した。遠征隊の隊員を募集する際は、「部隊長の出身地が重要な吸引力になり(ソラーノ 1998 pp.240 & 247)、親族や故郷の気心が知れた者を隊員にした。この濃密な人間関係がまだ秩序の出来上がってない遠征先に持ち込まれ、イスパノアメリカ社会の規範の一つになった。現地は地理的多様性と民族的亀裂、征服にともなう分断的統治によって相互不信感が支配している荒々しい社会であった。植民者、クリオーリョ、メスティソは、「拡大した家族、友人関係など個人関係を軸にして安住できる空間・サークルを形成」した(遅野井 2005 pp.70-71)。

ペルソナリスモの風潮がカウディリョ主義へ

ラテンアメリカ社会はペルソナリスモが強く、人間関係は「家族、コンパラスゴ(疑似的な親族関係)を介した拡大家族、友人関係など個人関係のネットワークを軸に」展開する(遅野井 2005 p.71)。人と人との関係や気持ちのつながりを大切にするこの風潮は、植民が北東部の砂糖農園主を頂点として発展したブラジル社会の方がスペイン語圏よりも強いようである。そこでは“アミーゴ”的な関係が幅を利かす。学校や職場など、場を共有している人間同士のつながりよりも強い場合が多い。

この文化から生まれたのがカウディリョ主義である。ラテンアメリカでは人々は上位に位置するカウディリョに従う政治意識が強い。政治社会の統合や結束を得意とせず、相互信頼や水平的協調関係を築くことに弱く、「同一の政治共同体に属すという意識が希薄である。見ず知らずの個人が自由に組織を結成し」、アングロサクソン流の「共通の目標に向けて協力し合うという自治や市民社会の基盤が乏しい」。むしろ個人関係のネットワークや厳しい階層社会の下で、身分や財産、権力や地位の異なる二者の間で、カウディリョへの忠誠の見返りに庇護や恩恵を期待する直接的で垂直的な関係を重視する。政党はイデオロギーや思想というよりはパトロン・クライアントの個人的忠誠関係を軸に結成され、強い個性とカリスマ性をもった強力な指導者であるカウディリョに従うことによって政治が動く。政党の創設者は忠誠のチェーンの頂点に立つ人物で、その死はしばしば政党の分裂や解体に直結する。そしてこの政治的文化は、近代的な法治国家、政党政治には馴染まず、

法律や手続きに則った制度の定着を困難にしている。制度や手続きを柔軟に解釈する姿勢は安易にクーデタや革命など非合法的手段で政権が交代する原因にもなる(遅野井 2005 pp.70-73)。政権が変われば、自分の親族友人を実力不相応な地位に抜擢するなど、ほとんどの政府のポストが入れ替わる。優秀な人材が失われ、行政の継続性が失われる結果、組織としての記憶・記録が残らない。

米国人と違う個人主義の理解

昔から集団的行動に慣れ親しみ和を大切にしてきた日本人も、戦後は個人主義の風潮が強くなった。ラテンアメリカでも個人主義の観念が強い。もっとも米国人であるチャールズ・ギブソンによれば、個人主義はイスパノアメリカ人の「心理の一要素」であるが、それが意味するところは「合衆国では、個人主義が政治的、社会的、かつ、経済的概念」として使われるのに対し、ここでは、「倫理的、宗教的かつ個人的概念」として使われ、米国のように「第三者との機会もしくは義務の平等性というよりも、むしろその人自身の内的完成、個人の尊厳、個人の名誉、個人の魂の実現を命ずるもの」という意味で使われる。それは政治的に「従来からの定まった階級制度と相反するものではなく、民主主義を育むもの」にならなかった。また時には「他人の弱みに付け込み、変革のためよりも、むしろ、私利のために社会を利用するのを黙認」している(ギブソン 1981 p.233)。ブラジル人の S・B・デ・オランダも同趣旨のことを言っている(オランダ 1976 p.3)。

人種の混淆

ラテンアメリカは人種・民族の多様性によって特徴づけられている。もともとモンゴロイデ系の先住民が多く住んでいたところに 15 世紀末からスペイン人が加わった。ブラジルにはポルトガル人がやってきた。スペイン人達はアメリカ大陸全域に等しく植民したわけではなく、さほど関心のない場所は素通りした。先住民が労働力として利用できるメキシコ、メソアメリカ、南米の中央アンデス地帯を中心に住みついた。過酷な労働や疫病により先住民の人口が減少すると、アフリカから連れてこられた黒人奴隸がそこに加わった。

イベリア半島ではもともとのイベリア人に加え、ケルト人に始まってローマ人、ゲルマン民族、アラブ族の侵入を受け混血した。「大航海時代」のスペインには、ユダヤ人、貿易に従事する外国人、黒人奴隸やカトリックに改宗したイスラム教徒であるモリスコなど多数の人種が共存した(アルトマン 1998 p.225)。その歴史からヨーロッパの中でも最も人種・民族的偏見が少ない地域になった。ピコーン=サラスは、「スペイン植民地におけるカーストに対する偏見は、性的関係に対する態度や倫理的なタブーよりも政治的または経済的な動機によるものであった」と言っている(ピコーン=サラス 1973 p.122)。

こうした社会であったことで多数の黒人奴隸の存在やその制度は馴染みのあるものであった。ブラジル人のジルベルト・フレイレは、入植してきた時に砂糖農園でポルトガル人と黒人との混血化が進み、温情主義的で調和のある人種関係をブラジルにもたらしたばかりか、新しい人種が生まれ、人種

間の激しい憎悪や対立は起こらなかったと言っている。この辺が先住民のインディアンの生活圏外にとどまることを選び、黒人との人種的混淆をしなかったアングロサクソン族の北米と大きく違っている。

ちなみに 19 世紀半ばから 20 世紀前半にかけて、スペイン人、ポルトガル人、イタリア人などの南欧系の人が移住してきた。またドイツやイギリス、ポーランド、オランダからも多数の移民がやってきた。カリブ海の英國領の島にはインド人、パナマ運河の建設やペルーの砂糖農園の労働者として中国人が移住して来た。日本人はペルーの砂糖農園、ブラジルのコーヒー栽培の労働者としてやってきた。

こうした背景があって、ラテンアメリカではユーラシア大陸やアフリカで起きていくような民族紛争、アメリカ合衆国で起こっているような人種差別による抗争が少ない。人種偏見が小さい理由には、人種の混淆によって肌の色の境目がはっきりせず、民族間、人種が契機となって集団化することが極力抑えられていることや、言語、同じ社会の一員であるとの意識、慣行の中で人々が生きていることもある。それでも民族的、有色人種に対する人種的偏見が全くないとは断言するのは難しい。差別には、皮膚の色などの身体的特徴や血筋のみならず、属する社会階層、社会的地位、文化的水準、経済的状況、その人の教育水準などが関係するからである。

混血メスティソ文化

征服の初期に「新大陸」に渡ったスペインの移住者には男性が多くた。先コロンブス期に文明があり人口密度の高かった地域に都市を作って住んだ。地方官吏のコレヒドール、エンコメンデロなどのスペイン人は先住民女性と居を構え、混血メスティソという私生児を作った。先住民女性の方でも「スペイン人」とみなされるのを期待したり、メスティソには税負担がないことから、租税、その他の義務を免れようとスペイン人男性と情を交わしたりした(ポマ 1992 pp.186-187)⁸。

メスティソは植民地時代に白人のスペイン人植民者から蔑まれ疎外されたが、その区別は厳密なものではなかった。色が白ければスペイン人の子として認知され、或る程度教育があり、行動面で非難されるところがなければ、金を払うことよって「格上げ恩赦」で混血者に白人の資格が与えられた(大貫 1984 p.316)。独立後は先住民も市民の一人としてその政治的権利が認められた。こうしてスペイン領アメリカでは、メキシコ、エクアドル、ペルー、ボリビアのように先住民の多いところやアルゼンチン、ウルグアイ、チリのように少ない国々など、国によって濃淡はあるものの、血と文化の融合、慣習の習合が進んだ結果、新しい国民意識が醸成され、メスティソ文化が形成された。ブラジルでは黒人奴隸との間で混血が進み、クレオール文化が生まれるが、それは別の

⁸ カトリック王のフェルナンドは、1514 年 1 月の勅令で「インディオの男性であると女性であると問わず、当然のこととして、望む相手と自由に結婚できることを保障する。このことはインディオにも、スペイン人にもまたインディアスで生まれたスペイン人にも適用されることで、彼らの結婚に際して、何らの傷害も与えられるべきものではない」として、スペイン人と先住民の混血を合法化し(山田 1984 p.94)、積極的に推進した。

稿で述べる。

言葉は帝国の同伴者

興味深いことに、人文主義者のエリオ・アントニオ・デ・ネブリハが「新大陸」発見の年である 1492 年にロマンス諸語の最初の俗語文典である「カスティーリャ語文法」を著した。この文法書の表現基準に則り、モザイク国家であったスペインの様々な地域の人々が、より効率的で精度の高い情報の交換と意志の疎通ができるようになった。またカスティーリャ語は「新大陸」征服にあって支配のための有力な手段であった。15世紀に人口が増加し、経済と交易で繁栄したアンダルシアから 2 分の 1 ないし 3 分の 1 のスペイン人植民者が渡航し、アンダルシア風のカスティーリャ語が移植された。まさにネブリハが上記の本の序論で書いたように、「言語は帝国の同伴者」である(ト

マス 2006 p.91)。イスパノアメリカでケチュア語が話されるペルーの山岳部、アイマラ語のボリビア、グアラニ語の巴拉グアイでも共通の通用語はカスティーリャ語である。

また言葉は民族文化の根源、共同体の紐帯、個人または集団のアイデンティティの原点である。ピコーン=サラスが言うように、「共通の歴史的基盤が育ち、イスパノアメリカが一九世紀の帝国主義諸勢力によって分断されて、第二のアフリカになる事態が避けられた」のは、スペイン語によって家族的親近性を保つことができたからである(ピコーン=サラス 1973 p.55)。言葉を通じて文化を伝え、人々の共通の思考方法を養い、イスパノアメリカの人々を一つの世界にまとめた。これはキリスト教がラテンアメリカで果たした役割と同じである。

参照文献

- アコスタ, ホセ・デ(青木康征訳)(1992) 『世界布教をめざして』、岩波書店。
- 網野徹哉(2022) 「トレント公会議とアンデスにおける先住民の布教」 荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畠洋一・富谷至・中野聰・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直巳・吉澤誠一郎編 『世界史 14 南北アメリカ大陸～一七世紀』、岩波書店。
- アルトマン, イーダ(立石博高訳)(1998) 「移住者と社会—スペイン領アメリカの背景へのアプローチ」 関哲之・立石博高編訳 『大航海の時代 スペインと新大陸』、同文館。
- 岩崎周一(2017) 『ハプスブルク帝国』、講談社。
- エリオット, J. H. (越智武臣、川北稔訳)(1975) 『旧世界と新世界』、岩波書店。
- エリオット, J. H. (藤田一成訳)(2009) 『スペイン帝国の興亡』、岩波書店。
- エリオット, J. H. (立石博高/竹下和亮訳) (2017) 『歴史ができるまで』、岩波書店。
- 大貫良夫(1984) 「メスティソの誕生」 大貫良夫・唐須教光著 『民族の世界史 13 民族交錯のアメリカ大陸』、山川出版社。
- 遼野井茂雄(2005) 「ラテンアメリカの政治」 国本伊代・中川文雄編著 『ラテンアメリカ研究への招待[改訂新版]』、新評論。
- オランダ, S・B・デ(マウリシオ・クレスポ訳)(1976) 『ブラジル人とは何か』、新世界社。
- ギブソン, チャールズ(染田秀藤訳)(1981) 『イスパノアメリカ植民地時代一』、平凡社。
- ケイメン, ヘンリー(立石博高訳)(2009) 『スペインの黄金時代』、岩波書店。
- 住田育法(2022) 「ブラジルの起源を探る セルジオ・ブアルケ・デ・オランダ」 小池洋一・子安昭子・田村梨花編著 『ブラジルの社会思想』、現代企画室。
- ソラーノ, フランシスコ・デ(篠原愛人訳)(1998) 「スペイン人コンキスタドール—その特徴」 関哲之・立石博高編訳 『大航海の時代 スペインと新大陸』、同文館。
- トーマス, ヒュー著(岡部広治監訳 林大訳)(2006) 『黄金の川—スペイン帝国の興隆』、大月書店。
- 名古忠行(1992) 『アメリカン・コモンウェルス』、法律文化社。
- 中川文雄(1995) 「ラテンアメリカの価値観と行動様式」 中川文夫・三田千代子編著 『ラテンアメリカ 人と社会』、新評論。
- 中川文雄(2005) 「ラテンアメリカの社会」 国本伊代・中川文雄編著 『ラテンアメリカ研究への招待[改訂新版]』、新評論。
- 中隅哲郎(1994) 『ブラジル学入門』、無明舎。
- ピコーン=サラス M.(G. アンドラーデ/杉江四郎訳)(1973) 『イスパノアメリカ文化史』、河出書房新社。
- ヒル, フェデリコ・G.(G. アンドラーデ/杉江四郎訳)(1971) 『ラテンアメリカーその政治と社会一』、東京大学出版会。
- ポマ, ワマン(染田秀藤・友枝啓泰訳)(1992) 『アンデスの記録者 ワマン・ポマ』、平凡社。

- 三田千代子(1995) 「ラテンアメリカの人と社会の成り立ち」 中川文夫・三田千代子編著
『ラテンアメリカ 人と社会』、新評論。
- 南川高志(2013) 『新・ローマ帝国衰亡史』、岩波書店。
- 宮野啓二(1992) 「スペイン人都市とインディオ社会」 歴史学研究会編 編集担当富田虎雄/清水透 『南北アメリカの500年 第1巻 「他者」との遭遇』、青木書店。
- 山田善郎(1984) 「スペイン語、ポルトガル語と原住民語」 増田義郎・山田善郎・染田秀藤編 『ラテンアメリカ世界』、世界思想社。
- ラデロ・ケサーダ、ミゲル・アンヘル(大内一訳)(1998) 「コロンブスの時代のアンドルシア」 関哲之・立石博高編訳 『大航海の時代 スペインと新大陸』、同文館。
- 渡部和男(2023) 『スペインと中南米の絆』、彩流社。